

敗戦直後の知識人による人間形成論と教育

大塚久雄の人間類型論に着目して

The Intellectuals' View of Character Formation and Education Soon after the World War II:
A Case Study of Hisao Otsuka for His Human Typology

山崎雅子

YAMAZAKI, Masako

【要旨】 本稿は、第二次世界大戦後の知識人の人間形成論において、戦後の人間像がどう提示され、それを形成する教育がいかにかに論じられたかを、経済史家の大塚久雄（1907–1996）の人間類型論を通して考察している。大塚は戦後日本の民主化と政治・経済の再建を支える主体を、近代的人間類型に打ち出された「自由な民衆」に期待し、それを形成する方法として、社会制度の変革も含み、社会のあらゆる機会とあらゆる力を利用して行われる最広義の「教育」を提起した。とくに彼はそうした主体が生み出される倫理的人間類型としてのエートスを重視し、その創出の必要を強調したが、戦時においても彼は生産力拡充の問題と絡んで経済倫理としてのエートスを論じ、その創造の方法を、総力戦体制下の人間形成の概念である錬成に求めていた。本稿は大塚の近代的人間類型と教育への論及を、彼の戦時下でのエートスに関する発言とあわせて検討し、彼のエートスや人間類型への基本的な考えとその人間や教育に対する見方が、戦時も戦後も本質的に一貫していたこと、しかし彼が戦時には国家政策を支持する形で、戦後は民主化の推進という文脈でエートスや教育を論じていたことを明らかにした。また戦後の知識人の教育への理論提起や関与と同様に、大塚の主体像の提起も、社会をつくる主体の形成を教育の課題に据えた一方で、戦時との連続性をもつ議論から教育の新しい目標がつくられていく一端を担ったことを指摘した。

キーワード

大塚久雄, 知識人, 人間形成論, 近代的人間類型, エートス, 「自由な民衆」, 最広義の「教育」

はじめに

筆者は先に第二次世界大戦後の知識人による教育への理論的関与の実態に迫るため、戦後の教育界に影響力をもった清水幾太郎の教育論を、戦前からの形成過程を追いながら検討した¹。敗戦後、知識人が専門を超えて教育へ活発な発言や理論提示を行い、それが教育のあり方に影響を与えたという事実をふまえて、そうした知識人と教育の関わりを解明していくことが、戦後教育研究の深化にはもちろん、今日の教育を考える際にも重要な意味をもつと考えるからである。本稿はそのさらなる解明をめざして、戦後の知識人の人間形成論をとりあげ、そこで人間像がどう提示され、それを形成する教育がいかに論じられたのか、その論が提起される時代的背景も含めて明らかにする。

敗戦後の新しい社会の創造という課題は、社会の構成員の育成を役割とする教育に対して高い期待と関心を集めた。戦時の沈潜を経て自由を得た知識人たちもまた、戦後の社会像とそれを支える人間像を模索するなかで、教育の問題に論及している。なかでも経済史家の大塚久雄(1907-1996)が1946(昭和21)年4月に『大学新聞』に発表した「近代的人間類型の創出——政治的主体の民衆的基盤の問題——」は、敗戦後の社会を支える人間の形成という問題を、もっとも早く論壇に提起し、同種の議論に先鞭をつけた論考であり、同時に人間形成の観点から知識人が教育に言及した早い時期の論考といえる。

周知のごとく大塚は、『株式会社発生史論』(1938年)、『近代欧州経済史序説 上巻』(1944年)、『近代資本主義の系譜』(1947年)の著作にみられるように、戦前より近代西欧の資本主義の成立に関する実証的な研究を行ってきた。その研究は、イギリスを中心とした西欧の資本主義の成立史を解きながら、それとの対比で日本の「前近代性」を浮かび上がらせるという意味をもつものであった。そして戦前の「講座派」マルクス主義の問題提起を受け継ぎつつも、マルクス主義の方法によらぬ合法的な社会科学的研究として、戦時下で閉塞的な状況にあった知識人に学問上の可能性を示し、戦後になって西欧近代社会が日本のめざすべき方向として注目されるなかでは、「大塚史学」の名で広く世の関心を集めたのだった²。

一方で大塚は、敗戦直後より上述の「近代的人間類型の創出」をはじめ、のちに著書『近代化の人的基礎』(1948年)に収められる「人間類型」や「エートス」をテーマにした論考を相次いで発表した。彼が専門の経済史から「越境」したこれらの論考を書いたのは、敗戦後「民主革命」が叫ばれながら、社会変革に比べて「人間変革(すなわち人間類型の変革)」が軽視されていることに、「社会変革と人間変革とは同時進行的に遂行されなければならない」と考え、社会変革に密着した人間変革の必要を強調しようとしたためであった³。本稿は、この人間類型やエートスによって敗戦後の社会と人間の問題を追究した大塚の例を通して、人間形成のための教育を知識人がどう論じたかを探りたい。

敗戦後の大塚の人間類型やエートスに関する発言は、当時の知識人の精神的位相や学問的志向を象徴する例として、敗戦後の思想状況や「戦後啓蒙」が語られる際には必ずや引き合いに出されてきた⁴。また大塚史学、戦後史学、社会科学、市民社会派などの切り口から行われてきた大塚の学問に関する議論でも、彼の敗戦直後の活動に言及するものはほとんどが、この人間類型論に着目してきた⁵。近年、戦後日本の社会科学の発展が総力戦体制下の学問研究の成果を基盤とすることを論証し、戦後思想の基底的枠組みを再評価する試みが進んだが⁶、そうしたアプロー

チからの研究でも大塚の人間類型論はとりあげられ、それと戦時における動員思想との連続性が指摘されている⁷。大塚の戦争協力の問題解明は本稿の趣旨にはないにしても、戦時との連続性に着目する方法は、本稿にとっても示唆に富む。他に本稿の目的と近接する研究として、大塚の人間類型論の教育的観点からの考察や理想的人間像としての「近代的人間類型」の分析がある⁸。だがそれらが、大塚の戦後の発言に限っての考察であることを考えても、大塚の戦時の言動をも視野に入れ、戦後へ引き継がれたものや捨象されたものを確認しながら、敗戦後の大塚の人間形成と教育に関する問題提起の検証が進められねばならない。

そこで本稿では、大塚の敗戦後の人間類型やエートスへの問題提起を、戦前の彼の問題関心や発言との関わりを考慮しつつ検討し、人間のありようとそれを形成するための教育に対する彼の問題意識や考えを明らかにして、敗戦からこのかた、さまざまな形で語られ議論されてきた人間形成と教育という課題の一つの原点を照らし出したいと考える。検討の対象は、「近代的人間類型の創出」をはじめとする人間類型の変革に関する彼の論文のうちとくに教育に言及したものと、それに関連する戦前・戦後の論文とする。

1. 近代的人間類型の創出と「教育」

大塚久雄著『近代化の人間の基礎』は、1946年から1947年にかけて発表された七つの論文で構成されている。そのうち教育についてふれているのは、「近代的人間類型の創出」、「自由と独立」、「自由主義に先立つもの」の3論文で、いずれも敗戦の翌年に発表された。まずは大塚の戦後最初の論文といえる「近代的人間類型の創出——政治の主体の民衆的基盤の問題——」に、近代化を支える人間に関する彼の見解の骨子を確認しよう。この論文で大塚は、戦後の日本経済の再建が、外からの強制的な力によってではなく、日本それ自体の自主的で自発的な力によって、真に民主的な形で推し進められるべきであるとした。そしてそれを推進する政治的主体を形づくるための民衆的基盤の成立に着目し、日本の民衆を近代的・民主的な人間類型へと教育する必要を説いている。

大塚によれば、日本の民衆が示す人間類型は、いわゆる「アジア的なもの」か、もしくは近代「以前」的なものでしかなく、そこには近代人に特有の内面的自発性も、市民社会に特有の「公平」さも、近代科学成立の基礎である合理性も、近代精神を特徴づける民衆への愛と尊敬や社会的関心も見出せない。むしろ「大目に見る」の言葉に象徴される、本当は好ましくないが黙って見逃しそれを問わないという、民衆の人格を侮蔑し、民衆自身が自己を侮蔑する精神的雰囲気ははびこっている。民衆が自己の人格的尊厳を認め、自律的に社会秩序を維持し公共の福祉を促進する「自由な民衆」になってこそ、民主主義が創出され、経済の民主的再建の物質的基礎である生産力も自主的に創出される。つまりこうした「自由な民衆」が、「近代生産力の決定的要因であり、近代生産力それ自身」なのである。それゆえに日本の民衆の決定的な部分が「自由な民衆」となること、すなわち「近代的人間類型に打ち出されつつ民主主義の人間主体として立ち現われる」ことが、日本社会の近代的・民主的再建においてなにより必要となる。

そのために大塚が着目したのが、教育の問題であった。それも「最も広義での教育の問題」である。というのは、単に教育だけでは民衆を近代的人間類型に打ち出すに十分ではなく、教育に呼応する客体的諸条件が創出されている必要があるからだ。それゆえ教育を成り立たせる物質的

地盤の整備も含めた「教育」が、人間類型の創出の重要な方法となる。なかでも勤労民衆の社会的・経済的地位の向上と本格的な国内市場の創出は不可欠で、これらの条件が整備されて、「教育」は客観的効果をあげることができる。そして民衆が近代的人間類型へと鍛え上げられ、その独立した自由な勤労民衆とそれらによって形づくられる国内市場が近代「生産力」として機能するにいたって、日本の経済と社会の再建への道が開かれると論じたのである。

では近代的人間類型はいかなる類型の特質をもつのか。その点について大塚は、マックス・ヴェーバー (Max Weber) の研究に依拠して、人間類型の問題の中心をなすエートス (倫理的人間類型) の問題に言及している。ヴェーバーは、近代西欧的エートスとアジア的エートスを対比して、前者を「内面的品位」innerliche Würde の倫理で、後者を「外面的品位」äusserliche Würde の倫理と特徴づけた。ヴェーバーによれば、アジアの倫理では「体面を保つ」ことがなによりも問題となる。内面的な高さや深さはさほど問題ではなく、教育の程度や地位の上下や儀礼的な手続きなどの外面的なものが高く評価され、いわゆる根源「悪」の観念は存在しない。他方、近代社会の倫理においては、個人の内面性に深く根ざすところの根源「悪」がなによりも問題となり、外面的な表われ方と関係なく、内面的な倫理の高さが評価される。むしろ民主主義的な社会秩序をつくり上げ、それを支えていく人間的主体となる民衆は、この二つのうち近代西欧的エートスが示す、個人の内面的価値を自覚して人間を人間として尊重するような倫理的人間類型によって性格づけられる。大塚はこのようなエートスの創造を現下の諸問題の基本をなす問題として、近代的・民主的人間類型を創出するためのあらゆる側面からの取り組みのなかでも、きわめて重要な意義をもつと指摘したのである⁹。

大塚は日本の民主化を支える主体を、近代的人間類型に打ち出された民衆に期待し、またそのような民衆をつくり出すことを「教育」に期待した。現下の「教育」の問題を、指導者層の創出ではなく、民衆の近代的人間類型への変革におき、その「教育」を、精神面での変革の前提となる物質的条件の整備も含んだ広い概念にとらえ、エートスの創造という倫理的雰囲気形成に働くものとした。戦後の日本社会の改革が「外」からの強制的な力で進められている現実に対して、「内」からの主体的な力による生きた民主化を実現するために、彼はその主体形成を可能とする人的・精神的基盤としての近代的人間類型の創出を主張し、方法となる「教育」の重要性を説いたのだった。

つづく「自由と独立」と「自由主義に先立つもの」という論文においても、大塚はこの「教育」に言及した。前者では、独立と自由を体現するベンジャミン・フランクリンが理想の人間類型となる欧米社会に対して、日本では「上」に立つ者が権威をもち、「下」の者はこれに従いその慈恵を待ち望むという「親心」的雰囲気のなか、自発性のない恭順な人間類型が形成されてきた。これを近代的で独立しかつ自由な人間類型へ向上させることが教育の責務で、そのためには「最広義における教育が、あらゆる側面から民衆の人間類型の近代化・民主化を目標として意識的に推進されなければならない」。すなわち労働組合も農民組合も協同組合も、また家庭生活も宗教団体も文化団体も、みな同様に教育機関としての意味と役割を得て、もちろん「学校」教育の意義も重視して、「最広義における教育機関のあらゆる場所において、近代的・民主的人間類型の形成が意識的計画的に推し進められなければならない」。そしてそのような近代人「教育」は、民衆の労働の生産性の向上や富裕の増大といった物質的諸条件が満たされて最大に機能するのだから、人間づくりという主観的条件とその物質的基盤の整備という客観的条件が相補いつつ同時に推し

進められる必要があると指摘した¹⁰。

後者の論文においても大塚は、民衆の決定的な部分が内面に「良心の自由」をもった人間類型へと打ち出されていくとき、はじめて「自由主義」は正しい意味で成立しようとする論じ、そうした人間類型を創造するための一つの見通しとして、最広義における「教育」を提示した。最広義というのは、「環境の創出」という意味での社会制度の変革を含むからである。また「教育」は、学校教育という狭いものではなく、家庭や社会生活のあらゆる部面で民衆の人間類型の近代化を押し進めていくことを意味する。さらにもう一つ必要なのが、民衆の決定的な部分が「魂の奥底から揺り動かされるような内面的体験を経過すること」である。それは、いわば「最広義における Religiosität あるいは faith」の獲得であるが、近代西欧では、禁欲的プロテスタンティズム、なかでもピューリタニズムがこの獲得を可能にしたのだと述べている¹¹。

大塚は、日本の民主的再建への鍵となる近代的人間類型の創出のために、人間が関わる社会のあらゆる機会と力を利用して、精神的・倫理的な側面からの人間形成への働きかけと、教育の効果を最大とするのに不可分な物質的諸条件や諸環境の整備と充足を、同時に押し進めていくことを主張した。つまり最広義の「教育」とは、民主化を推進する主体の精神的基盤としてのエートスの創造とその創造を可能とする社会システムの構築という、民主化の主観的条件と客観的条件の両者が整備されていくところに成り立ち、民衆の近代化・民主化と日本社会の近代化・民主化を媒介するものであった。

ところで前述したように、大塚が日本の民衆の示す人間類型を近代「以前」的と評したのは、そこに自発性や公平さ、合理性、民衆への愛と尊敬の念、さらに社会的関心といった近代人に特有の資質が欠けているとみたからである。ならば近代的人間類型が生まれ出るには何が必要かといえば、ヴェーバーがいう近代西欧的エートスのような個人の内面的倫理を重んじるエートスを彼はあげていた。また彼は、ベンジャミン・フランクリンの態度やその教説から、独立と自由、勇気と自発性、人間に対する行動原理としての「公平」という徳性、認識対象への「合理性」、実践に際しての「周到」という徳性、そして勤労と質素という徳性を引き出して、「自発性、合理性、社会連帯性への自覚、そしてそれらを貫く経済生活の重視という現実的態度」を近代的人間類型の特質としている¹²。さらに論文「自由主義に先立つもの」では、自己の利害のためには、内面的・倫理的な諸徳性を踏みにじって顧みない「エゴイズムの自由」に性格づけられたベイラント型という人間類型に対して、近代的人間類型へつながるのは、自己を律し民衆一般への隣人愛に生きる「良心の自由」というエートス（精神的雰囲気）に打ち出されたカルヴァン型＝小カルヴァン型人間類型で、このエートスに裏づけられた近代的人間類型の創造が「自由主義」成立の前提となると説いている¹³。

ここで大塚は、公平、公明、周到、勤労、質素、友情、隣人愛などの徳性や、自発性、合理性、社会的関心、現実的態度という特質、そしてそれらから表出される「良心の自由」という倫理的・精神的雰囲気を、近代的人間類型を特徴づけるものとしてあげている。彼は民衆の決定的な部分がそのような人間類型に打ち出されてこそ、「自由な民衆」という古い封建的秩序を打破し新しい近代的・民主的なレジームを打ち立てる原動力が生まれると考え、経済の再建や民主化の推進、自由主義の確立、平和の再建などの戦後日本の課題が、民衆自らの手で民主的・自律的に実現されていくと論を展開した。そしてそうした人間類型への変革は、社会変革をともなう最広義の「教育」によって遂行されるとしたのである。

しかしながら大塚は、「教育」の具体的な内容やそれをいかに遂行すべきかについては、「筆者のような非専門家のよく云々しうところではない」として論じていない¹⁴。また近代的人間類型がいかに生れ出るかについても、ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に西欧の事情を学び取るように薦め、その書が近代人「教育」の目標と方法を探るうえでも示唆深いと述べているにすぎない¹⁵。

もとより彼の目的は、「教育」の中身を構想するより、「教育」によって創出すべき人間類型やエートスを当面の問題として提示することにあった。より正確に言えば、人間類型やエートスは、先にも出てきた「生産力」とその向上という彼の経済学および経済史研究における課題と絡んだ研究関心であるが、一方の「教育」は、敗戦後の社会や経済の再建を論じる際に、それを担う人間をつくりだす精神的・倫理的基盤を実現する方法として意識化し言及した問題にとどまった。

上でとりあげた3論文が教育へ言及しているのも、それらがいずれも1946年中に執筆されていることと無関係ではなからう。その年の3月、連合国軍総司令部の要請で来日したアメリカ教育使節団は、日本の教育の抜本的な改革を勧告する報告書を提出した。8月には使節団に協力した「日本側教育委員会」を母体に「教育刷新委員会」が設置され、報告書をもとに教育改革への本格的な議論が展開されていく。論文「近代的人間類型の創出」が『大学新聞』に掲載されたのは、アメリカ教育使節団の報告書が提出されて間もない4月であり、つづく2論文も教育の変革が希求される気運のなかで書かれている。一方同じ『近代化の人間の基礎』に収められた論文でも、教育基本法と学校教育法が公布施行されて新学制が発足し、教育の制度や方針が確立していく1947年に執筆した「ロビンソン・クルーソウの人間類型」や「魔術からの解放」では、大塚はとくに教育に言及していない。つまり大塚が日本の自主的な再建と民主化を担う主体の形成方法として教育に論じたのは、教育が変革の渦中に置かれ、その動向が広く議論を呼びうる時期においてなのであった。社会変革に比して人間変革が遅れていることを案じた大塚にしてみれば、近代的人間類型とその基盤となるエートスの創造につながる教育を論じたのは、アメリカの指針のもとに教育の制度的な枠組みが整えられようとしている状況に対して、人間の形成とそのため社会的・精神的基盤の確立という教育の本質的な内容と目標を、日本の「内部」から提出するという意味をもっていたと考えられる。

このように大塚は、戦後の人間形成という問題に対して、人間類型やエートスという表現をもって日本人の精神的・倫理的側面の近代化を主張し、その方法に最広義の「教育」をあげた。だがこの戦後社会に対する問題提起が、マックス・ヴェーバーの理論に依拠して進めてきた彼の戦前来の研究成果の上に築かれ、そして問題状況を分析する鍵となった人間類型やエートスが、人間形成の問題だけでなく、彼の専門である経済の問題、とくに生産力の向上という問題でも重要な概念として戦前から用いられてきたことは、彼の人間観や教育観を考えるうえで無視できない。

では大塚は人間類型やエートスを生産力との関係からどう論じてきたのか。戦前に書かれたものも含めた他の論文にみていこう。

2. エートスと生産力

「生産力と人間類型——近代資本主義発達史研究の基礎論点——」は、上述の3論文と同じく1946年中に書かれ、著書『近代化の人間の基礎』に収められた論文だが、同書収録の他の論文に

比べれば内容は大塚の専門分野に近く、近代イギリスにおける「生産力」の形成と拡充が近代的人間類型の存在を前提としたことを説いたものである。

この論文で大塚は、ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』によりながら、「〔伝統の様式に囚われない合理的・実践的な〕思考集中の能力と、労働を義務とするひたむきに内向的な態度、しかも通例これと結びついて〔現われる〕、賃銀とその額を計量しようとする厳密な経済的資質と、労働能力の異常な増大をもたらす冷静な自己抑制と節度」を特質にもつ人間類型が、労働者層に広く浸透し、その存在が歴史的・社会的な前提となったとき、初めて近代的な資本主義が自主的に形成される可能性が生じるとみなし、この「人間類型」や「そのかもし出す精神的雰囲気」がヴェーバーのいう「資本主義の精神」であると説明した¹⁶。そして「営利の原理」に着目するヴェルナー・ゾムバルト（Werner Sombart）の人間類型論との比較から、「伝統主義〔の精神〕」と「資本主義の精神」の人間類型を区別する基準は、「営利」の有無ではなく、「それぞれの人間類型のうちにおける『営利』の存在形態（＝構造連関）」にあると述べた。つまり人間類型を構成する構造要因は、「営利」そのものではなく、「『営利』一般などの背後に見出されるべきもの」で、それがヴェーバーのいう「エートス」（倫理的人間類型）である。このエートスは、生産力の増強をねらう貨幣操作や賃金政策からつくり出されるのではなく、それらが実行される前から存在している。企業家が労働者を選択し経営（生産力）を打ち立てる前提には、「資本主義的」な人間類型が勤労民衆に広く浸透し、その人間類型が大量に形成されていなくてはならないのである¹⁷。

このように大塚は、社会で広い層を占める勤労民衆の近代化が、資本主義を支える条件である生産力の前提になるとして、人間の問題から生産力を論じた。とはいえ生産力の向上は、戦後の社会建設の課題として論じられただけでなく、戦時下においても喫緊の課題として叫ばれており、大塚自身もそれをエートスとともに議論していた。

1937（昭和12）年7月の日中全面戦争の開始以降、9月の「臨時資金調整法」や「輸出入品等臨時措置法」の制定、10月の企画院の創設と、経済に関する統制が次々と敷かれ、翌1938（昭和13）年4月の「国家総動員法」の成立により、統制経済の方向への国家的な舵取りが本格化する。こうした国家による経済への直接統制の強化と並ぶ戦時経済の重要な課題が、軍需の増加とそれにとまなう民需用生産の不足に対して、生産および生産力の増強をはかることであった。戦時体制の長期化と総力戦化が生産力の増強への要請を強めるなかで、「一国の生産力の進展を目標として社会構造の合理的改造を主張する理論」¹⁸が、「生産力理論」として知識人の間から現れる。風早八十二や大河内一男がその主唱者として有名だが、大塚も当時、「経済倫理の実践的構造——マックス・ヴェーバーの問題提起に関連して——」（1942年）、「経済倫理と生産力」（1943年）、「生産力と経済倫理」（1944年）、「経済倫理の問題的視点——工業力拡充の要請にふれて——」（1944年5月）、「最高度“自発性”の発揚——経済倫理としての生産責任について——」（1944年7月）などで生産力に言及し、それを「経済倫理」との関わりから論じていた。

この経済倫理もまた、当時の緊要な論題であった。柳澤治の整理に従えば、戦時期の日本で経済倫理の問題は、(1)消費倫理・生活倫理、(2)流通倫理、(3)分配倫理、(4)生産(力)に関わる経済倫理(①「経営倫理＝企業家・経営の倫理」と②「労働倫理・職業倫理」)、(5)統制経済の確立という「新しい経済の建設」に対応する「新しい経済倫理」の五つの局面から論じられていた¹⁹。このうち大塚は、生産(力)に関わるという局面から経済倫理を問題とした。しかも経済倫理の「労

働倫理・職業倫理」の側面を重視し、その観点から生産力拡充の課題を考察し、さらに現実の経済倫理の批判的検討を通じて、経済情勢の変化に対応する「新しい経済倫理」の構想へと言及を進めている。

大塚が経済倫理を「労働倫理」の面から重視したのは、生産力を構成する主体的要因としての労働が、単に肉体的な労働力で成り立つのではなく、フリードリッヒ・リストが「国民の精神的資本」と呼ぶような国民の歴史的な精神的諸状況と離れがたく結びついていると考えたからである。労働を昂揚させ生産力を進展させるのは労働意志だが、その労働意志の昂揚に決定的な影響を与える「国民のもつ歴史的な人間的 (persönlich) な事情」、いわば「国民生活の精髓として見出されるもの」こそ、「経済倫理」にほかならないととらえたからである²⁰。

つまり彼は経済倫理を、「何らか単なる倫理学の体系とか道徳的訓戒といったものではなく、歴史的な国民生活のうちに現実^レに生きている倫理的な雰囲気、時にはるかに習俗化して、むしろ心理的な雰囲気^レに近迫するところ」の「エートス」ととらえた²¹。別の表現では「国民のもつ倫理的な雰囲気」であり、国民生活のうちに生きるエートスと言いかえられる²²。このエートスとしての経済倫理が、国民の労働意志の昂揚にいかなる影響を及ぼしているかを見極め、生産力拡充へ作用する経済倫理がいかなる構造をもつかを検討することが、日本の差し迫った課題であるとして、彼は上述の諸論文を書いたのだった。そして近代西欧の生産力拡充を推し進めた「資本主義の精神」を分析し、労働意志の昂揚をひき起こしたのが営利心ではなく「世俗内的禁欲」というエートスで、その精神的源流は禁欲的プロテスタンティズムのエートスにまで遡るとしたヴェーバーの研究によりながら、労働意志の昂揚と生産力の拡充をもたらす主体的要因は、営利か非営利の問題レベルよりもはるかに深いところのエートスの性格や構造にあるとし、近代的生産力の拡充という目前の要請に応じる新たなエートスを、歴史的な「資本主義の精神」を超えたところに構想する必要を説いたのだった。

では彼が考えるエートスとはいかなる性格のもので、いかに創出すべきものであったのか。それについては、「生産力と経済倫理」と「最高度“自発性”の発揚——経済倫理としての生産責任について——」の2論文で言及されている。

前者で大塚は、近代的生産力の拡充に作用し労働意志の昂揚を促進するエートスを、ヴェーバーの指摘を引用して、「労働が自己の『生活』のためのもではなく、[あたかも絶対的な自己目的——天職——であるかのように] [不断に] はげむ」ところの精神的雰囲気^レで、しかも「こうした心理は、決して人間に生れつきのもではなく、また高賃銀^(ママ)や低賃銀^(ママ)から直接作り出すことのできるものでもなくて、むしろ長日月の教育の結果としてのみ生じうるもの」と説明した。そして「不断の訓練によって創出されるべきもの」であるから、まさに「錬成」が必要で、それも「錬成」一般ではなく、このようなエートスの創出という目的を明確にとらえた「錬成」でなくてはならないと述べている²³。

さらに後者の論文では、「資本主義の精神」の歴史的限界を超える新しい「経済倫理」(エートス)について、「全体からの生産力拡充の要請に対して、生産責任を直接かつ明確に意識するものであるに止らず、『目的(方法的)合理性』を十分に伴ったところの強力な『自発性』によって支えられていなければならぬ」ものと表現した。「資本主義の精神」において個人の全体(国家)に対する生産責任は、個人的な営利(利潤の追求)を媒介に遂行される。だがこの資本主義的「自由」経済を超克すべく進められている「経済統制」(「経済計画」)のもとでは、営利などの媒介を止揚

して、個別的「経営」（または個人の勤労）が国家的計画へつながっていると意識し、その生産責任を果たそうとする「経済倫理」（エートス）が、「自発性」と「目的合理性」という特性をもって現れねばならない。しかもその場合の「自発性」は、「人間的・感情的な欲求があらゆる束縛から解放され、自由に発揮される状態、いわゆる *liberum arbitrium*」をさすのではなく、むしろこれとまったく反対の、「禁欲に結びつき、不斷の陶冶によって獲られるべきもの」で、「絶えざる錬成によって鍛え上げられるべきもの」だと論じたのである²⁴。

前者で彼は、労働意志の昂揚を促進するエートスを、労働自体が絶対的な自己目的として遂行されるような精神的雰囲気とし、後者では新しく構想すべき経済倫理（エートス）を、個人の労働と全体（国家）的な計画とのつながりを認めて、進んで生産責任の遂行に努めるような精神や態度と説明した。共に個人の内発的な意志や責任感を経済倫理（エートス）の基底的なものとして重視しているが、とりわけ後者の論文では、その特性として、「禁欲」に結びつき、しかも「目的（方法的）合理性」に十分裏づけられた「自発性」をあげ、私欲や営利を離れて全体＝国家の計画に進んで参入していく個人のあり方を重視した。「サイパン島激戦の報を耳にしつつ稿」²⁵を脱したというこの論文は、そうした戦時情勢と、民間企業を軍需会社に指定し企業経営を国家の直接統制下に置いた軍需会社法（1943年10月公布）のもと、国家に対する生産責任が強く問われた状況を背景に、戦時経済における個人の責任と倫理を説き、「最高度“自発性”の発揚」をすべての勤労者に求めている。

総力戦体制下で「自発性」や「自主性」、「自律性」、「主体性」といった性向が、国家目的を達成するための国民動員の契機として称揚され、その称揚に働いたのが、体制内批判を通して国家政策の合理的な転換を試みようとした知識人の言動であったことは、総力戦体制下の思想や社会状況に関する研究が指摘している²⁶。大塚が自発性に裏づけられた新しい経済倫理を措定したのは、軍需会社法をもって確立した国家による独占的資本主義体制を、資本主義的「自由」経済とそれに付随する営利主義を超克する新しい経済形態ととらえ、その倫理的基盤を国民の側からの意志や力に求めようとしたからである。経営者をはじめ個々の勤労者の国家に対する生産責任が問われる状況を逆手にとり、営利を問題とせず労働自体に価値を認めそれに励むという勤労者側の自発性や主体性に、国家の意向を承るだけではない国民の体制関与の仕方を探ろうとしたのである。

そうした彼の経済倫理の構想や自発性の主張は、国家政策を認めざるをえない状況にあって、その政策に資本主義の欠陥を乗り越える要素を見出し、国民の自発的な参加をもって政策に修正を加えつつ社会構造の転換の糸口をつくろうとした、内在型の政策批判とみることができる。だが自発性や主体性を叫べども、国家政策を容認し追随していることに変わりはなく、むしろその主張によって国民の政策への自発的参加という「動員」を合理化し、政策の遂行を後押しした面も否めない²⁷。経済統制と生産力増強を重視する国家的な経済計画（政策）のもとで、営利を超えた新しい「経済倫理（エートス）」を打ち立てるという大塚の構想は、自発性や主体性など、個人の内側からの積極的な志向を総力戦体制下での変革の理論に取り込むことで、国家による一方的な支配と統制からの自律を探りつつも、政策への自発的な参加の呼びかけとしても働いた点で、抵抗とも戦争協力とも解される両義的な面をもっていた。

加えて上の2論文で、大塚はエートスの創出の方法にもふれていた。生産力拡充の要請に応え「絶対的な自己目的」として労働に励むようなエートスが、長い時間をかけた教育の結果として

生じうるとし、彼はその方法を「不断の訓練」としての「錬成」に求めた。また新しい経済倫理（エートス）の特性である「自発性」が、禁欲と結びついたもので、「不断の陶冶」や「絶えざる錬成」によって鍛え上げられるとして、エートスたる内面的なものの創出には、きわめて長期的で持続的、かつ集中的な訓練としての教育、つまりは「錬成」が必要だとみなした。

1941（昭和16）年3月制定の国民学校令が、「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」と規定したのに象徴されるように、錬成は総力戦体制下の学校教育の最高目的であるとともに、学校以外の職場や地域、家庭などのあらゆる組織や場において、体育や軍事訓練、精神的な修行や修練、あるいは宗教的儀礼などを通して、国民の心身を練り鍛え上げることを表す概念として用いられた。もちろんその目標は、総力戦体制を支える「国民」的性格の育成という、いわば総力戦が要請する人間類型をつくりだすことにあった。

清水康幸によれば、錬成の理念や意味は、総力戦体制構築へ向けて国民動員や国民統合が進められる動きと、1930年代より「教学刷新」のかけ声のもと学問・教育の全般的な再編がはかれる動きのなかで形成されている。前者の動きにおいて錬成は、軍事力や労働力の確保という「人的資源」政策を実現させるための国民教化の理念となり、国民生活のあらゆる教育機能を国家が有機的かつ計画的に統合し、国民の性格や資質を国家的道徳へ結びつける「教育の新体制」を表す言葉として国策に位置づけられた。また後者の動きでは、教育の新しい目的に掲げられ、学問・教育を国体思想と政治体制に従属させ、学校を修練施設として徳育や訓練を重視するものへと転換する、戦時下の教育改革を象徴する言葉となった。こうして錬成は、総力戦体制を担う人間形成の課題を集約した言葉として、戦時下の日本で機能したのであった²⁸。

上の論文で大塚は、労働意志の昂揚を促進するエートスを創出し、その特性である自発性を鍛え上げる方法を、この時代の人間形成を包括する概念で、人間形成の全領域にわたって持続的な訓練を施すことを意味する錬成に求めた。もちろん彼が必要とみたのは、「錬成」一般ではなく、自己目的として労働に努めるようなエートスの創出を目的に実行される「錬成」である。彼は具体的な内容を語っていないが、国民生活の基底をなすエートスを形成する禁欲的で持続的な訓練というからには、学校はもとより、家庭や職場や地域生活のあらゆる場をあげて、労働を是とし、自らそれに励むような規範や態度を意識的に体得させていくシステムを思い描いていたに違いない。

その点で戦後の大塚が、近代の人間類型の創出を、社会のあらゆる機会と場と力の意識的・計画的な利用とその物質的基盤の整備からなる最広義の「教育」によって進めるよう述べていたことが想起される。同じように彼は、戦時の経済体制にふさわしい経済倫理（エートス）が、あらゆる機会と場と力を利用し国民生活に根ざして創出されるべきだとし、当時の人的資源政策を支える概念であった錬成をその方法とした。しかも彼は錬成を方法にとりながらも、その内容にまでは踏み込まなかった。これもまた、彼が最広義の「教育」の内容やそれをいかに遂行すべきかに言及しなかったのと同じく、彼の関心が主として人間を内部から動かすエートスそのもの、もしくはエートスがいかなるものとして創出されるべきかにあったためと思われる。

だがねらいがエートスの提起と探究にあったとしても、総力戦体制の価値基準に即した人間形成を意味する錬成を方法とした点は、彼の時代状況への対応姿勢として検討を要する。なにより錬成は総力戦体制下で国民を教化し統合するための理念や方法であって、人間の発達への助成を主眼とする教育とは本質を異にするのである。

こうして大塚が総力戦体制下での社会的要請に応える経済倫理としてエートスを論じ、その形成の方法を錬成にとったこと、また自発性の主張によって、抵抗の意を含みつつも、結果的に体制に協力的な姿勢を示したことを確認したうえで、次に、戦時の彼の議論や姿勢と戦後の近代的人間類型の創出を掲げた啓蒙的言説がどうつながっているかに焦点を絞って、彼の戦後の人間形成論を総括しよう。

3. 人間形成と教育への視座の位相

戦時において経済倫理としてエートスを論じ、総力戦体制下の人間形成をめざす錬成にその創造の方法をみた大塚は、敗戦後は社会を支える主体の形成を近代的人間類型というエートスの創出の問題ととらえ、そのための教育の重要性を指摘した。この過程で彼が一貫して追究したのは、当該社会にふさわしい経済を樹立するために必要な生産力の問題である。そして人間類型とそれを精神的にかたどるエートスは、労働を成り立たせ、その昂揚を通して生産力の向上を導くための決定的な条件として、彼にとって生産力と不可分な一貫して追究しなくてはならない問題であった。

その点で人間類型やエートスへの関心は、戦時から戦後へ引き継がれたというよりも、彼が経済や生産力について考究するかぎり、いかなる状況下でも彼のうちに存在していたといえる。同様に彼が求めたエートスも、生産力を上げ経済を安定させるために必要なものであるからには、戦時のエートスも、戦後のそれも、共通する要素をその性格に有していた。彼は戦時の論文で自発性や禁欲や合理性を要素にあげたが、戦後の論文でも、自発性、合理性はもちろん、禁欲につながる勤労と質素を要素にあげている。また戦時において生産責任の自覚と遂行という形で、自己の社会的使命を果たすことをエートスと結びつけて重視したが、それに近いものは、戦後になってエートスの要素に社会的連帯の自覚とそれを貫く現実的態度をあげたところにあることができる。

ただし戦時も戦後もエートスの創出を問うているとはいえ、それを論じた背景や依拠した価値は当然異なる。戦時の彼は結果的に国家政策を引き受ける形でエートスを論じ、戦後にあっては民主化をめざしてエートスを論じていた。それにもかかわらず、ファシズム体制の一元的支配にそったエートスと、自由と独立を価値とする民主主義の気運のもとで語られたエートスは、ほぼ同じ要素をもって想定されていた。

また彼は、戦時においても戦後においても、あらゆる場所や機会を用いた意識的な教育的働きかけとそれに必要な物質的諸条件の整備によって、エートスの創造を構想した。その構想は、総力戦体制下の人的資源としての人間の形成を表す錬成と結びつき、戦後にあっては社会を支える主体としての人間の形成を目的とする最広義の「教育」という言葉で提示された。国民教化を意とする錬成と、人間の自立的発達の助成を方針とする教育は、同じく人間形成への働きかけを表しながらも本質的に異なるが、彼はこれらを実質的にほぼ同じ内容を表すために用いたのである。

こうした大塚の戦時と戦後の言説の共通性をふまえれば、彼のエートスに対する問題関心は、戦中・戦後と変わることなく一貫していたことと、そのうえで総力戦体制下において課題として論じられたものが、敗戦後の人間類型論では戦後の目標にそって組み替えられていることがわかる。その組み替えは、敗戦を機に彼が民主化や近代化の推進へと立ち位置を変え、エートスにつ

いての論点を、戦時の経済倫理から戦後の民主化や近代化を支える人間主体へと移したことでなされた。つまり論じられるエートスの向かうべき対象が変化し、その変化によって戦時の文脈で語られたものは、戦後の目標である民主化の提案へと形を変えた。だがエートスについての彼の考えの根本的な部分は、戦時から戦後へそのまま移行している。

同様のことは大塚の人間や教育に対する見方にもあてはまる。戦後の大塚は、日本の民主革命の過程で人間変革と社会変革は同時に遂行されるべきだと考え、民主主義や自由主義に先立つものとして人間の問題をあげ、自発性、合理性、禁欲、社会的関心、現実的行動などで裏づけられる近代的人間類型へ民衆を鍛え上げながら、その人間類型に打ち出された民衆の手を通して政治や経済の再建がはかられねばならないと主張した。一方、戦時においても彼は、戦時体制の構築に向けた社会変革とともに、新しい経済倫理に導かれる人間変革を志向し、戦時経済を支える人間という観点から、自発性や合理性、そして禁欲という性質の必要を提示した。もちろん戦時の自発性や合理性は、体制の意向内で意味をなすものであったのに対し、敗戦後に語られたそれらは、個人の内面から自然に湧き出る自発性や科学的な判断にそった合理性であった。だが大塚の求める人間が、上にあがったような性質や傾向を備え、その状況下でめざすべき社会と経済の建設を担う、社会変革に必要不可欠な主体であったことは、戦時も戦後も変わりなかった。そしてそのような人間を生み出す精神的土壌が成立していない現実には、彼が社会変革とともに人間変革の問題を投げかけてきたことにも変わりはない。

その人間変革の方法である教育についても、大塚は社会制度の変革も含み、社会生活のあらゆる部面を利用して人間の意識的計画的な形成を推し進めていく広い意味での教育を、戦後は最広義の「教育」として、戦時には「錬成」という表現をもって掲げた。労働生産性を高め、民衆の生活を豊かにし、社会全体の底上げをはかる改革が進まないかぎり、民衆は教育に積極的な意味を見出さず、教育自体の効果も上がらない。それゆえに教育を成り立たせる客体的条件の整備は、人間形成への直接的な働きかけと同時進行で行われねばならない。またエートスが社会的な性格であるからには、エートスおよびそれに基づく人間類型は、学校だけでなく、社会のあらゆる場や機会を通じて創造されねばならない。彼にとって社会変革を支える人間とその人間を生み出す社会的環境の形成は、まさに社会変革と一体化した「教育」を通して実現されるのであった。

こうした人間観や教育観に立って敗戦後の近代的人間類型の創出を主張した大塚は、戦後の「近代主義」の代表的論者にあげられるが、彼のめざすところが社会と民衆の近代化にすべて帰結したかという点、そうとはいえない。のちに彼がロビンソン・クルーソーを例に近代的人間類型と近代資本主義の歴史的限界を指摘しながらも、日本のように近代的人間類型が確立されていない場合の経済（生産力）の建設には、「内面的エートス（人間類型）の民衆的確立が特殊的に重要視されねばならない」と述べたように²⁹、彼は近代の段階へもいたっていない日本の実情に即して、当面の課題を近代化に置いたのである。むしろ彼が求める経済や社会およびそれを支える人間のありようは、近代的人間類型が広く民衆をかたどって成立することを前提に、その人間類型がもつ限界を超えたところに描かれるべきものであった。いうならば、「自由な民衆」とその民衆を政治的主体や自主的な生産力とする市民社会の確立をみたうえで、そこからより高次のエートスが創造され、それに基づく新たな人間と社会が形成されていくという希望的展望があったのだろう。その点では戦時に彼が唱えた「資本主義の精神」の歴史的限界を超える新しい経済倫理の創造も、戦時体制への対応という点を差し引けば、近代の限界を克服するより確固たるエー

トス確立への追求の現れとみることもできる。

ともあれ敗戦後の大塚は、のちの新たなエートスの創造をも見据えて、まずは人間と社会の近代化を企図し、近代的エートスに打ち出された人間の形成について最広義の「教育」を方法に論じたのだった。彼が最広義の「教育」の機能に、民衆の「魂の奥底から揺り動かされるような内面的体験」を通した *Religiosität* もしくは *faith* の獲得を課したことは、彼が民衆の精神の根本的な変革というべきものを期し、なににも揺るがぬ強い信念を内面に打ち立て、その信念のもとに自発的・合理的に判断し行動しうる社会的主体の登場を希求したことを教える。戦後の日本で何がこの *Religiosität* にあたるかについて彼は明言しなかったが、おそらく彼自身は自らの信仰やエートスに関する研究からその具体的なイメージをもっていたのではないか。彼の敗戦後の人間変革の問題への「越境」は、その獲得につながる気運を醸成しようとした試みといえるのかもしれない。

おわりに

以上、大塚久雄の近代的人間類型と教育への論及を、彼の戦時下でのエートスに関する発言とあわせて検討してきた。エートスや人間類型は、大塚にとって経済や生産力および社会の形成と結びついた重要な問題であり、生産力を構成し社会を担う人間とその形成を行う教育も、エートスや人間類型を追究するうえで考究せねばならない問題であった。したがってそれらに対する彼の基本的な見方や考えは、戦時も戦後も本質的には一貫していた。しかしそれらについて彼が戦時には国家政策を支持する形で、戦後は民主化の推進という文脈で論じたという事実は否定できない。

すでに清水幾太郎の教育論を検討するなかでも述べたように³⁰、敗戦後の教育研究の復興と教育制度の確立に先駆けた知識人の教育への理論提起と関与は、国家に従属する人間から社会をつくる主体へという人間観の転換をうながし、その主体形成を戦後の教育の課題に据えるという役割を任じた。大塚による近代的人間類型にかたどられた主体像の提起も、その一端を担ったといえる。だが一方でそのことは、民主化の観点に立ちながらも戦時との連続性をもつ彼ら知識人の議論から、戦後の教育の新しい課題や目標がつけられていったことを意味している。そしてそれは、戦時の経済倫理とほぼ同じ特質をもつ近代的人間類型によって民主化の主体を論じた大塚の場合にもあてはまるのである。

さらに本稿での検証を先の清水幾太郎の場合と照らし合わせたとき、大塚の描いた人間像と教育のあり方が、清水のそれらときわめて近似していたことが浮かび上がる。大塚が掲げた近代的人間類型に打ち出された「自由な民衆」に相当するものを、清水は合理性、自主性、積極性を備えた「近代的人間」としてあげていた。また大塚が戦時に「錬成」でもって表し、戦後は最広義の「教育」と呼んだ、教育を社会制度の変革と並行しながら、学校のみならず、社会のあらゆる領域をあげて行うという考えは、清水においても戦時の「政治的な」社会教育や戦後の「教育の社会的分散」の提唱としてみることができた。戦時の「近代の超克」論や戦後の「近代主義」的な傾向の影響と、戦時も戦後も教育の再編が社会体制の変化への対応として論じられたことを考えれば、近代的価値と人間についての考察や学校中心から教育の社会化へという志向は、大塚や清水の場合に限らず、同時期の他の知識人の議論にも見出せるに違いない。

それゆえ戦後の教育制度が確立するまでの間に出されたさまざまな人間形成論と教育論を照査し、その特徴を構造的に明らかにするという課題が、今後の研究の道筋にあがってくる。もちろんその前提には、本稿で行ったような知識人各自の議論を戦前との関連も交えて詳細に読み解くことが不可欠である。個々の事例に関する検証を積み重ね、それらの時代の特徴や歴史的意義を見極めながら、戦後の知識人の教育への関与の実態を解明していきたい。

註

- 1 山崎雅子「清水幾太郎の教育論の生成と展開にみる敗戦直後の知識人と教育」『立教大学教育学科研究年報』第53号、2010年。
- 2 鈴木博「戦後の講座派思想」（『講座 戦後日本の思想』第二巻、現代思潮社、1962年）、内田芳明『ヴェーバーとマルクス——日本社会科学の思想構造——』（岩波書店、1972年）、飯沼二郎「大塚久雄とその時代」（『思想の科学』臨時増刊号、1974年9月）、近藤和彦『文明の表象 英国』（山川出版社、1998年）などを参照。
- 3 大塚久雄「近代化の人間の基礎 序」『大塚久雄著作集 第八巻 近代化の人間の基礎』岩波書店、1969年、p.164。初出は『近代化の人間の基礎』白日書院、1948年。
- 4 日高六郎「戦後の『近代主義』」（『近代主義』現代日本思想大系34、筑摩書房、1964年）、久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』（勁草書房、1966年）、石田雄『日本の社会科学』（東京大学出版会、1984年）、吉田傑夫『戦後思想史』（青木書店、1984年）など。
- 5 大学新聞連盟編『大塚史学批判』（大学新聞連盟出版部、1948年）、上野正治「経済史学」（『近代日本経済思想史Ⅱ』近代日本思想史大系第6巻、有斐閣、1971年）、杉山光信『戦後啓蒙と社会科学の思想』（新曜社、1983年）、住谷一彦・和田強編『歴史への視線——大塚史学とその時代——』（日本経済評論社、1998年）など。
- 6 山之内靖・ヴィクター コシュマン・成田龍一編『総力戦と現代化』（柏書房、1995年）、山之内靖『日本の社会科学とヴェーバー体験』（筑摩書房、1999年）など。
- 7 中野敏男「大塚久雄と丸山眞男——動員、主体、戦争責任——」青土社、2001年。他にも同種の観点から、J. ヴィクター・コシュマン「規律的規範としての資本主義の精神——大塚久雄の戦後思想——」（前掲『総力戦と現代化』）。
- 8 鈴木正「教育と人間類型——大塚久雄論——」（『思想の科学』別冊 No.6、1972年4月）、三吉利幸「『近代的人間類型』と『戦後』日本——大塚久雄の言説について——」（『唯物論研究年誌 第10号「戦後日本」と切り結ぶ思想』2005年、青木書店）。
- 9 大塚久雄「近代的人間類型の創出——政治的主体の民衆的基盤の問題——」『大塚久雄著作集』第八巻、pp.169-175。初出は『大学新聞』1946年4月11日。
- 10 大塚久雄「自由と独立」『大塚久雄著作集』第八巻、pp.177-181、p.185。初出は「自由な近代人」『教育文化』1946年7・8月合併号。
- 11 大塚久雄「自由主義に先立つもの」『大塚久雄著作集』第八巻、pp.199-200。初出は「自由主義に先立つもの——近代的人間類型の創造——」『基督教文化』1946年11・12月合併号。
- 12 前掲「自由と独立」pp.182-184。
- 13 前掲「自由主義に先立つもの」pp.189-198。
- 14 前掲「自由と独立」p.181。
- 15 同上、pp.184-185。
- 16 大塚久雄「生産力と人間類型——近代資本主義発達史研究の基礎論点——」『大塚久雄著作集』第八巻、pp.241-245。初出は『歴史学研究』第123号、1946年8月、pp.1-15。
- 17 同上、pp.254-257。
- 18 高島通敏「生産力理論——大河内一男・風早八十二——」思想の科学研究会編『共同研究 転向』中巻、1960年、p.204。

- 19 柳澤治「戦時期日本における経済倫理の問題(上)——大塚久雄・大河内一男の思想史・学説史研究の背景——」『思想』2002年2月号, pp.76-77.
- 20 大塚久雄「生産力と経済倫理」『大塚久雄著作集』第八巻, p.328. 初出は『経済統制』第8巻第1号, 1944年。
- 21 大塚久雄「経済倫理と生産力」『大塚久雄著作集』第八巻, p.319頁. 初出は『経済往来』19号, 1943年。
- 22 前掲「生産力と経済倫理」p.329.
- 23 同上, p.338.
- 24 大塚久雄「最高度“自発性”の発揚——経済倫理としての生産責任について——」『大塚久雄著作集』第八巻, pp.341-343. 初出は『大学新聞』1944年7月11日。
- 25 同上, p.344.
- 26 たとえば山之内靖の大河内一男論「戦時期の遺産とその両義性」(『岩波講座 社会科学の方法 第Ⅲ巻 日本社会科学の思想』岩波書店, 1993年)など。
- 27 この観点から中野敏男は, 大塚の自発性の主張が「自発的な戦争体制参加への呼びかけ」であるにもかかわらず, 「主体性の覚醒」の呼びかけとして評価されてきたことを批判している(中野前掲書, p.261)。
- 28 清水康幸「総力戦下の人間形成と錬成」寺崎昌男・戦時下教育研究会編『総力戦体制と教育——皇国民「錬成」の理念と実践——』東京大学出版会, 1987年, pp.5-14.
- 29 大塚久雄「ロビンソン・クルーソーの人間類型」『大塚久雄著作集』第八巻, p.221. 初出は「ロビンソン・クルーソーの人間類型——その歴史的意義と限界——」『時代』1947年8月号。
- 30 前掲「清水幾太郎の教育論の生成と展開にみる敗戦直後の知識人と教育」を参照。